

中学校美術科

開隆堂が目指すもの 豊かな感性を育む美術教育



窓の中の透明な景色 (水彩 39 × 54cm) 生徒作品

そこにある花が赤いとか、品種が何であるかという分析や知識と、そこにある花がきれいだと感じられることには人として大きな違いがあります。

藤澤英昭 (千葉大学名誉教授)

開隆堂

美術科への期待

藤澤英昭 (千葉大学名誉教授)



OECD の PISA の国際的な学力ランキングが注目されています。問題になったのは「キー・コンピテンシー」という言葉です。「単なる知識や技能だけでなく、態度を含むさまざまな心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の複雑な課題に対応できる力」のことです。つまりそれまでの知識や技能を総動員して、自分でその場面ごとに問題を解決していく、新しい学力観、まさに「生きる力」のことです。

造形的な活動は典型的な問題解決学習です。その意味でまさに「生きる力」を育む期待を担っている教科といえます。絵に表したい光景を思い描き、白い紙の上に筆跡を残していきます。何回もの果敢な試行錯

誤。材料や用具とのやり取り。イメージとの照合。経験を総動員して、形・色などをすべて生徒自らが決めるのです。これらの代えがたい活動を真剣に、しかも楽しんで行えるのは美術科の授業だけです。彼らは一つのことを成し遂げた後では変容しています。この喜びにあふれた活動の結果として、その子どもなりの等身大の育ちが実を結ぶのです。人格形成の原点です。

美術教育へのもうひとつの期待があります。公教育の目標として文化の継承です。我が国の造形文化は諸外国でも高い評価を得ています。文化立国としての日本を考えると、一人ひとりの造形的な諸能力がさまざまな文化と接点をつくり、社会を動か

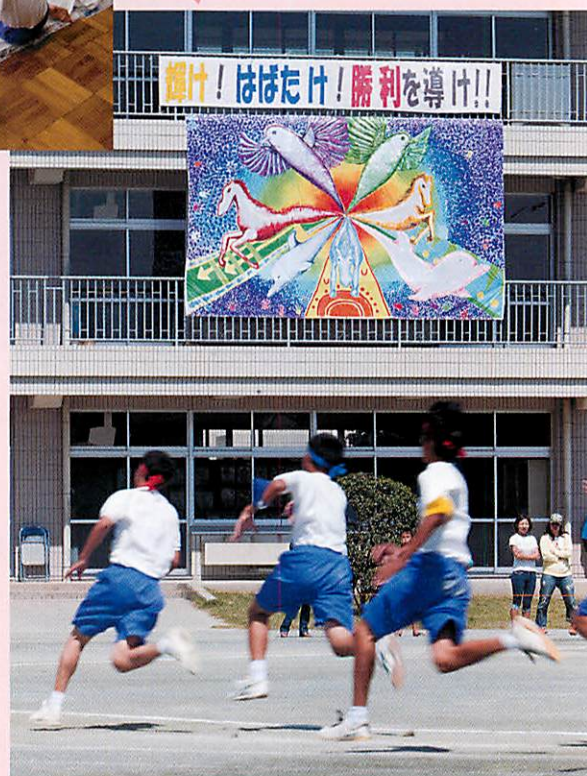
造形活動は
生きる力を育てる
試行錯誤の
問題解決学習



美術の力で日常の場所を創造的な空間につくり上げる。自分たちの看板で体育祭が盛り上がった。



色の組み合わせを考え、決定する。お気に入りのコースターをつくり、生活を豊かに。



藤澤英昭（ふじさわひであき） 千葉大学名誉教授。

1944年、東京都生まれ。東京教育大学大学院修了。小学校学習指導要領解説図画工作編作成協力者会議委員をはじめ、文部科学省各種協力者委員会委員を歴任。長年、小学校図画工作科および中学校美術科教科書の編修に携わり、日本の図工・美術教育をリードし続ける。

す力になることが必要です。造形活動はある意味で基幹産業を形成するとも言えるかもしれません。

さらにそれらの前提として、もっと深いところで感性の成熟があります。そこにある花が赤いとか、品種が何であるかという分析や知識と、そこにある花がきれいだと感じられることには人として大きな違いがあります。よく考えてみると人の行動のすべてはスキ、ステキなど感性を働かせることの上に成り立っているのです。科学も哲学も生活のしかたも。社会の全体的な成熟もここに基盤があります。すべての学びもここに立脚点があります。

激しく変化し続ける社会にあっては義務

教育の学びも生涯学習を前提とした視点が必要になっています。一生涯学び続け変化に対応することが必要とされる現代においては、義務教育期に楽しんで学ぶ姿勢を形成したいものです。そのために教科書では、一人ひとりが自らの課題を発見していけるような奥行き深い活動の提案が必要となります。よく誤解されますが、絵が上手いとか下手ということは楽しく学んだ経験の量の先に生まれてくるものです。どんな生徒も果敢に参加できる活力に満ちた美術の活動を通して自らが決定するという経験を重ね、学ぶ姿勢や文化との接点を血肉化し、社会とかかわっていく、それが美術教育に期待される「生きる力」なのです。

自ら課題を発見し、
さまざまなかかわりを
楽しんで学ぶ



さまざまな問題を解決するための方法を話し合い、ポスターの内容をまとめ、レイアウト、イラストレーション、配色などを工夫する。



小学生に自分の作品を紹介する。伝えたいことを作品で表す工夫をするとともに、作品について話し合ったり、自らの言葉で説明したりすることも美術の大切な学習。

さまざまな文化と
接点をつくり、
社会を動かす力に



地域からの依頼で、街の大きな壁に共同で壁画を描いた。「年月を経ても、見る人すべてに、ここに生きる喜びと勇気がわいてくることを願ってつくりました。」（制作者代表生徒）

今、想うこと

遠藤 彰子

(武蔵野美術大学教授・画家)



私たち日本人が「美しい」という言葉を使い、その意味になったのは室町時代からだそうで、奈良時代には「くはし」と言い、詳しいとか香しいのように細かい意味が、美しいのかわりに使われていたそうだ。平安の頃は「きよし」清いという言葉が美しいの意味に当たるそうだ。これは、私達の先人達が細かく、汚れない様を好んだということなのだろう。

そんな美に対する意識が、明治になり西洋文化の洪水に押しやられ、混沌とした状態となった。美を追求するものが、新しい文化に触発され、新しい美の基準を追い求めていくのは当然の流れだと言

えるのだが、それが現在ではあまりにも多様になりすぎたのではないかと考えさせられる。

私は教育現場でも根源的な美しさを再認識する必要があるのではないかと考えている。教育とは過去の財産を現在に伝える事が重要であり、しっかりとした基礎を学ぶべきところだと思うのだ。学生達には過去の財産をしっかりと学んだ上で、イメージを広げ、新しい発見をして欲しいと願っている。

また、描きたいものを描くための技術はいつの時代にも必要である。現在、美術は絵画だけではなく、映像、ファッショ

ン、イラスト、漫画等、様々な分野に広がりを見せている。どのような分野でも、人に自分の発想やイメージを伝えるうえで基礎となるのは、描く力にあるのだ。四角い平面の中で色彩の組み合わせや構図によって変化する印象の違いを模索することは、ものづくりの基本となるものだと思う。私も長く絵を描いてきたが、造形美を基本に、四季折々の美しさを取り入れながら、明日に向かって生きていく人間を力強く描いていきたい。そして、それが少しでも伝わることを願いつつ、日々絵筆を握っている。

(えんどう あきこ)



遠い日 (油彩 194×259cm) 1985年
中心に向かう渦巻き状の構図をとることによって、遠近感を生み出している。

[中学校美術科教授用資料] AA



開隆堂出版株式会社

<http://www.kairyudo.co.jp>

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘 1-13-1

TEL. [代表] 03-5684-6111 [編集] 03-5684-6117 [営業] 03-5684-6121, FAX 03-5684-6122

北海道支社 〒060-0061 札幌市中央区南一条西 6-11 札幌北辰ビル 8階

TEL.011-231-0403

東北支社 〒983-0043 仙台市宮城野区萩野町 1-11-1 萩野町 Mビル 2階

TEL.022-782-8511

名古屋支社 〒464-0802 名古屋市千種区星が丘元町 14-4 星ヶ丘プラザビル 6階

TEL.052-789-1741

大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町 2-10-16

TEL.06-6531-5782

九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港 2-1-5 FYCビル 3階

TEL.092-733-0174